

短期的なバージョンアップとしての装いの変化の検討

—装いの変化場面の内容および装いに期待する効用の自由記述から—

Examination of the Change in Attire as a Short-Term Upgrade

大久保 智 生¹・鈴木 公 啓²

Tomoo Okubo, Tomohiro Suzuki

要旨

本研究の目的は、短期的なバージョンアップとしての装いの変化について、装いの変化場面の内容および装いに期待する効用の自由記述から検討することであった。大学生103名（男性46名、女性57名）、社会人102名（男性32名、女性69名、不明1名）を対象に、自由記述による調査を行った。分析の結果、自分の意志で特定の装いを選択し変化させる場面とは「心機一転」と「プライベート」な場面であり、期待される効用としては「高揚感」などの気分の調整という側面が強いことが示された。一方、そうせざるを得ないために特定の装いを選択し変化させる場面とは「非日常」で「規律」のある場面であり、期待される効用としては「順応」と「アピール」という環境に合わせて順応していることのアピールの側面が強いことが示された。

問題と目的

装いは「やる気を出す」「落ち込んだ気分を上げる」といった気分の調整のために用いられることがある。また、装いは普段の自分とは異なる自分を演出するといった印象管理のためにも用いられることもある。こうした気分の調整や印象管理のための装いの活用は装いによる短期的なバージョンアップとして考えられる。具体的には、仕事モードになるためにメイクする、失恋したから髪を切る、魅力的に見せるために普段とは異なる衣服を着る、勝負下着を着用する、気分転換で時計を変えることなどが挙げられる。

様々な装いが存在しているが、装いは外観を変化させることで内面の変化を生じさせることから、多かれ少なかれ、短期的ではあるが、普段の自分とは異なるバージョンアップとしての側面を持っているといえる。このことは、装いが自他の心理面への影響を生じさせる「心理的機能」を有していることから明らかである。例えば、渡邊（2013）や宇山・鈴木・互（1990）はメイクアップ後の心理的状态や心理的効果について検討しており、西藤・中川・藤原（1995）は衣服が引き起こす感情について検討し

ている。このように装いは、外観を変化させることで心理的な変化を期待し、実際に心理的な変化を生じさせる機能を有しているといえる。こうした装いの心理的機能を鈴木（2020）は装いの「効用」として定義している。

人は装いによる「効用」を意識的・無意識的に期待する。装いによる短期的バージョンアップでは、自分の心を切り替えるためのツールとして、個人にとって意味のある特定の装いを選択することがある。鈴木ほか（2010）は、お気に入りの下着を着用する場面として、「ハレの舞台」、「面接・プレゼン」、「親密な他者との接触」、「ストレス対処状況」の4つの場면을挙げ、期待される効用が異なることを示している。このように装いは場面に合わせて期待される効用が異なることが考えられる。

装いによる短期的バージョンアップが生起する場面として、2つの場面が想定される。1つは、自分の意志で特定の装いを選択し変化させる場面である。これは能動的な変化の場面であり、具体的には失恋したことで気分を変えたいと思って髪を切るといったことがこれにあてはまる。この能動的な変化の場面では気分の調整の側面が強いといえる。もう1つは、自分の意志とは関係なく、そうせざる

1 香川大学

2 東京未来大学

を得ないために特定の装いを選択し変化させる場面である。これは受動的な変化の場面であり、具体的にはドレスコードがある場所に行くためにフォーマルな服を着るといったことがこれにあてはまる。この受動的な変化の場面では環境に合わせる順応の側面が強いといえる。

このように考えると、自分の意志で特定の装いを選択し変化させる場面と、自分の意図とは関係なく、そうせざるを得ないために特定の装いを選択し変化させる場面では、期待している心理的効用が異なることが予想される。短期的なバージョンアップとしての装いを理解するためには、明確に能動と受動とで場面を分けて考えていく必要があるといえる。しかし、その実態は明らかになっていないため、「能動的变化場面」、「受動的变化場面」の内容と期待している心理的効用について考えていく必要がある。

以上を踏まえ、本研究の目的は、短期的なバージョンアップとしての装いの変化について、装いの変化場面の内容および装いに期待する効用の自由記述から検討することである。本研究では、現代の日本において比較のおこなわれている「メイクアップ」、「ヘアスタイリング」、「衣服（アウター）」、「下着・肌着（インナー）」、「服飾雑貨・小物（アクセサリ、かばん、靴など）」の5つの装いによるバージョンアップについて、「能動的变化場面」、「受動的变化場面」の観点から検討していく。この5つの装いについて、能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面とはどのような場面か、この5つの装いを能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面で期待する効用が異なるのかについて検討していく。

方法

対象者と手続き

2020年12月～2021年1月に大学生103名（男性46名、女性57名）、社会人102名（男性32名、女性69名、不明1名）を対象に、自由記述による調査を行った。大学生の平均年齢は20.53歳（SD=1.30）、社会人の平均年齢は38.25歳（SD=11.10）であった。

調査内容

調査内容としては、①フェイスシート、②装いの変化の経験、③装いの変化場面の内容、④装いに期待する効用について尋ねた。

①フェイスシート：調査対象者に対して、性別、年齢、職業について尋ねた。

②装いの変化の経験：メイクアップ、ヘアスタイリング、衣服、下着・肌着、服飾雑貨・小物のそれぞれについて、「日頃おこなっている装いを変化させる経験はありますか？」という教示のもと、「はい」「いいえ」の2件法で回答してもらった。

③装いの変化場面の内容：②で「はい」と回答した人を対象に、メイクアップ、ヘアスタイリング、衣服・下着・

肌着、服飾雑貨・小物のそれぞれにおいて、「自分の意志で、いつもとは違った装いをするのはどのような場面ですか（能動的变化場面）」、「自分の意図とは関係なく、周囲の環境や他者に言われたことにより、いつもとは違った装いをするのはどのような場面ですか（受動的变化場面）」という教示のもと、どのような場面で日頃の装いを変化させるかについて、自由記述で回答してもらった。

④装いに期待する効用：②で「はい」と回答した人を対象に、メイクアップ、ヘアスタイリング、衣服、下着・肌着、服飾雑貨・小物のそれぞれにおいて、「③の場面において、どのような効果を期待していましたか」という教示のもと、能動的变化場面、受動的变化場面のそれぞれにおいて、期待している心理的効用について、自由記述で回答してもらった。

結果と考察

装いの変化場面の内容に関する検討

装いの変化場面について検討するため、「能動的变化場面」、「受動的变化場面」のそれぞれについて、自由記述で得られた回答全てを、KJ法を参考にしてカテゴリーに分類した。その結果、「非日常」、「規律」、「プライベート」、「心機一転」の4カテゴリーに分類された（Table 1）。以下において、この4カテゴリーに基づいて検討を行っている。

メイクアップに関する検討 メイクアップを能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面とはどのような場面かを検討するため、場面（2）と内容（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった（ $\chi^2(3) = 67.340, p < .001$ ）。また、残差分析の結果、「プライベート」と「心機一転」は能動的变化場面が多く、「規律」は受動的变化場面が多いことが明らかとなった（Figure 1）。

Table 1 装いの変化場面の内容のカテゴリー

カテゴリー	回 答 例
非日常	・旅行するとき
	・冠婚葬祭に参加するとき
	・派手に見えるのが望ましくないとき
規律	・規則で決められている時
	・仕事やアルバイトをするとき
	・実習に参加するとき
プライベート	・友達と遊ぶとき
	・好きな人に会いに行くとき
	・友人に言われたとき
心機一転	・気分を変えたいとき
	・個性を出したいと思ったとき
	・日頃の装いに飽きたとき

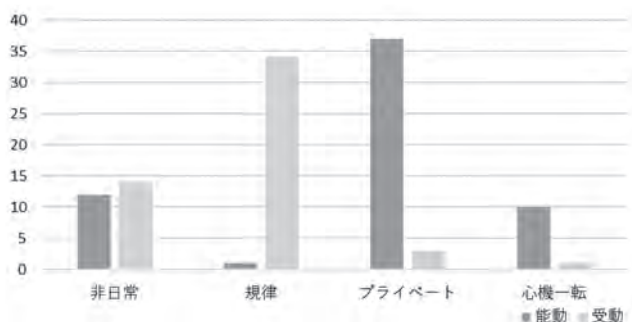


Figure 1 メイクアップの変化場面の内容

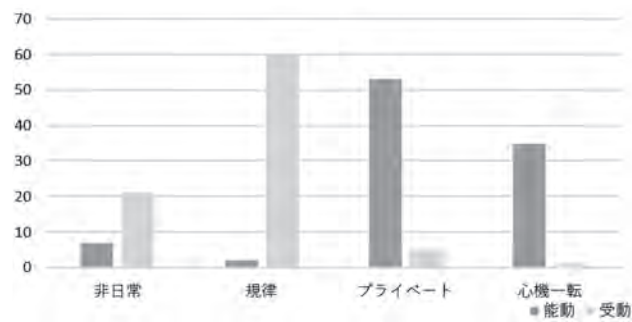


Figure 2 ヘアスタイリングの変化場面の内容

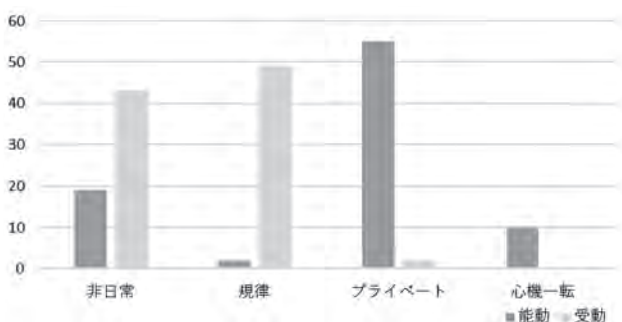


Figure 3 衣服の変化場面の内容

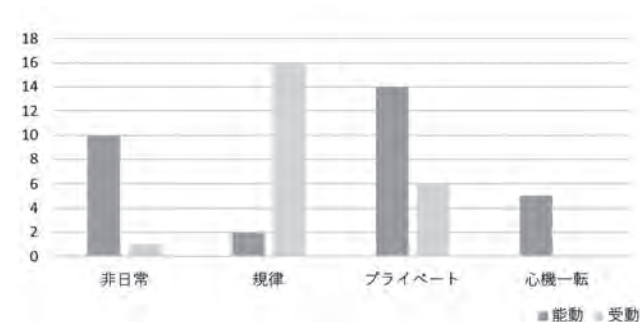


Figure 4 下着・肌着の変化場面の内容

このことから、メイクアップを能動的に変化させる場面とはプライベートな場面と気分を変えたい場面であるといえる。川名（2012）はメイクを施した顔は魅力を高めることを明らかにしているが、プライベートな場面で他者に好印象を与えたいという欲求からメイクを変化させていると考えられる。また、気分を変えたい場面では手軽に変化させることができることが影響しているといえる。一方、メイクアップを受動的に変化させる場面とは規律が求められる場面であるといえる。大坊（1993）はメイクによる周囲との調和を指摘しており、規律が求められる場面では周囲と調和を第一に考え、メイクを変化させていると考えられる。

ヘアスタイリングに関する検討 ヘアスタイリングを能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面とはどのような場面かを検討するため、場面（2）と内容（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 132.943, p < .001$)。また、残差分析の結果、「プライベート」と「心機一転」は能動的変化場面が多く、「非日常」と「規律」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった（Figure 2）。

このことから、ヘアスタイリングを能動的に変化させる場面とはプライベートな場面と気分を変えたい場面であるといえる。森川（2012）は顔の印象は髪型に影響されることを明らかにしているが、プライベートな場面では好印象を与えることを目的として、気分を変えたい場面では手軽

に印象を変えることができることなどが影響していると考えられる。一方、ヘアスタイリングを受動的に変化させる場面とは非日常を感じ、規律が求められる場面であるといえる。冠婚葬祭など非日常を感じる場面や規律が求められる場面では印象管理としてヘアスタイリングを行っているといえる。

衣服に関する検討 衣服を能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面とはどのような場面かを検討するため、場面（2）と内容（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 111.750, p < .001$)。また、残差分析の結果、「プライベート」と「心機一転」は能動的変化場面が多く、「非日常」と「規律」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった（Figure 3）。

このことから、衣服を能動的に変化させる場面とはプライベートな場面と気分を変えたい場面であるといえる。鈴木（2020）は衣服を選び購入することは外見の魅力を意図的に作り出すことに関わることを指摘しており、親密な他者に魅力的に見せたいという欲求が影響していると考えられる。一方、衣服を受動的に変化させる場面とは非日常を感じ、規律が求められる場面であるといえる。神山（1998）は衣服が着想者の態度などを周囲に伝える役割を有していることを示しており、周囲に調和することが望ましいとされる非日常場面や規律が求められる場面では、衣服の変化によって規範遵守的な態度を伝えていると考えら

れる。

下着・肌着に関する検討 下着・肌着を能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面とはどのような場面かを検討するため、場面（2）と内容（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 25.834, p < .001$)。また、残差分析の結果、「非日常」と「プライベート」は能動的变化場面が多く、「規律」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった (Figure 4)。

このことから、下着・肌着を能動的に変化させる場面とは非日常的な場面とプライベートな場面であるといえる。鈴木ほか (2010) は多くの女性が通常とは異なる特別な場面で特別な下着を身に着けていることを明らかにしており、さらに鈴木ほか (2014) は男性においてもここぞという場面で特別な下着を身に着けていることを明らかにしている。このことから勝負事や大事な物事に取り組む非日常場面やプライベートな場面で能動的に変化させていると考えられる。他の装いでは「非日常」は受動的変化場面が多いことから、「非日常」が能動的变化場面が多いことは下着・肌着特有の特徴といえる。一方、下着・肌着を受動的に変化させる場面とは規律が求められる場面であるといえる。規律場面では周囲との調和からシャツから透けることを避けるため、受動的変化場面が多くなったと考えられる。

服飾雑貨・小物に関する検討 服飾雑貨・小物を能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面とはどのような場面かを検討するため、場面（2）と内容（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った。その結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 77.010, p < .001$)。また、残差分析の結果、「プライベート」と「心機一転」は能動的变化場面が多く、「規律」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった (Figure 5)。

このことから、服飾雑貨・小物を能動的に変化させる場面とはプライベートな場面と気分を変えたい場面であるといえる。衣服やヘアスタイリングだけでなく、服飾雑貨や小物も変化させることでよりプライベートな場面を楽しみ、気分を変えていると考えられる。一方、服飾雑貨・小

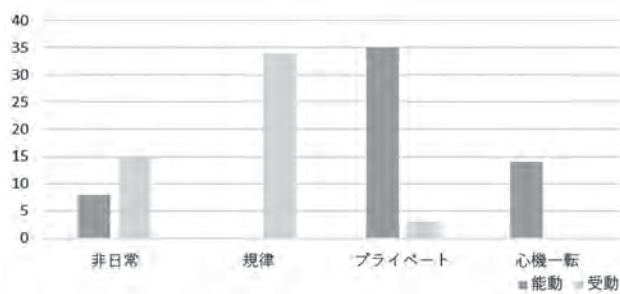


Figure 5 服飾雑貨・小物の変化場面の内容

物を受動的に変化させる場面とは規律が求められる場面であるといえる。規律場面では服飾雑貨や小物も制限されるため、周囲の状況に合わせた服飾雑貨や小物に変化させていると考えられる。

装いに期待する効用の検討

装いに期待する効用について検討するため「能動的变化場面」、「受動的变化場面」のそれぞれについて、自由記述で得られた回答全てを、KJ法を参考にしてカテゴリーに分類した。その結果、「高揚感」、「気合い」、「順応」、「アピール」の4カテゴリーに分類された (Table 2)。以下において、この4カテゴリーに基づいて検討を行っていく。

メイクアップに関する検討 メイクアップを能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面で期待する効用が異なるのかを検討するため、場面（2）と効用（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 38.425, p < .001$)。また、残差分析の結果、「高揚感」は能動的变化場面が多く、「順応」と「アピール」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった (Figure 6)。

このことから、メイクアップを能動的に変化させる場面

Table 2 期待する効用のカテゴリー

カテゴリー	回答例
高揚感	・テンションが上がる ・気分が上がる ・気分転換できる
気合い	・気が引き締まる ・モチベーションが上がる ・自信がつく
順応	・周囲に合わせる ・違反しないようにする ・ネガティブ思考を払拭してくれる
アピール	・魅力的に見せる ・印象を良くする ・かわいいと思われる

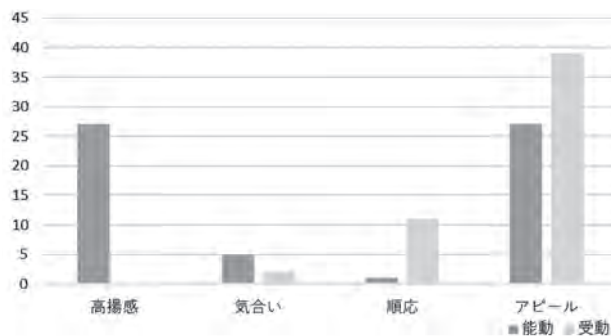


Figure 6 メイクアップの期待する効用

では気分の高揚や気分転換を期待しているといえる。松井・山本・岩男（1983）はメイクによって変身願望の充足やストレス解消といった効果を自覚できることを示しているが、気分の高揚や気分転換を求めて自らメイクを変えていると考えられる。一方、メイクを受動的に変化させる場面では周囲に合わせることや周囲へのアピールを期待しているといえる。受動的変化場面でのメイクアップの特徴は周囲から目立ちすぎず、他者からの印象を重視したものであることが考えられる。

ヘアスタイリングに関する検討 ヘアスタイリングを能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面で期待する効用が異なるのかを検討するため、場面（2）と効用（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 97.871, p < .001$)。また、残差分析の結果、「高揚感」は能動的変化場面が多く、「順応」と「アピール」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった (Figure 7)。

このことから、ヘアスタイリングを能動的に変化させる場面では気分の高揚や気分転換を期待しているといえる。これは手軽にできるというヘアスタイリングの特徴が反映されていると考えられる。一方、ヘアスタイリングを受動的に変化させる場面では周囲に合わせることや周囲へのアピールを期待しているといえる。髪型は化粧、衣服と並んで印象形成に影響を及ぼすことから、受動的変化場面ではその場での安心を期待していると考えられる。

衣服に関する検討 衣服を能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面で期待する効用が異なるのかを検討するため、場面（2）と効用（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 24.658, p < .001$)。また、残差分析の結果、「高揚感」は能動的変化場面が多く、「順応」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった (Figure 9)。

このことから、衣服を能動的に変化させる場面では気分の高揚や気分転換を期待しているといえる。Kwon & Shim (1999) は気分調整に衣服を用いていることを指摘しているが、人は能動的に衣服を変化させることで手軽に気分を調整していると考えられる。一方、衣服を受動的に変化させる場面では周囲に合わせることや周囲へのアピールを期待しているといえる。衣服は化粧、ヘアスタイリング以上に周囲に順応していることがアピールできるものであり、受動的変化場面ではその場での安心を期待していると考えられる。

下着・肌着に関する検討 下着・肌着を能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面で期待する効用が異なるのかを検討するため、場面（2）と効用（4）のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった ($\chi^2(3) = 24.658, p < .001$)。また、残差分析の結果、「高揚感」は能動的変化場面が多く、「順応」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった (Figure 9)。

このことから、下着・肌着を能動的に変化させる場面では気分の高揚や気分転換を期待しているといえる。鈴木ほか (2010) はお気に入りの下着を着用する場面では動機づ

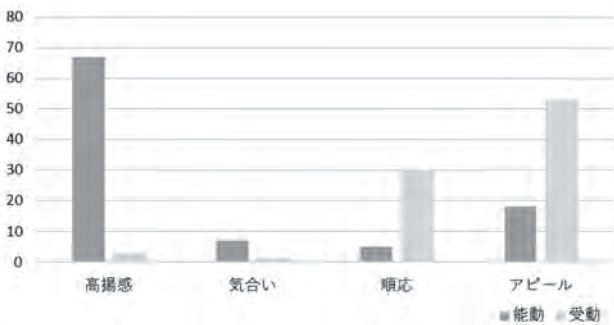


Figure 7 ヘアスタイリングの期待する効用

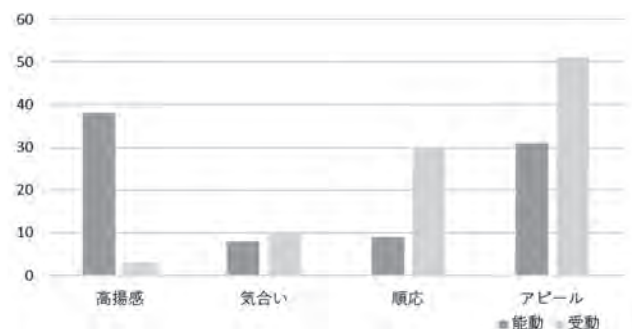


Figure 8 衣服の期待する効用

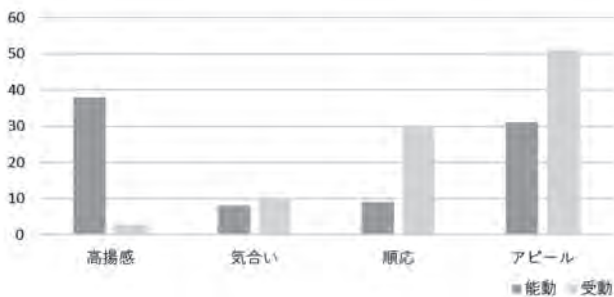


Figure 9 下着・肌着の期待する効用

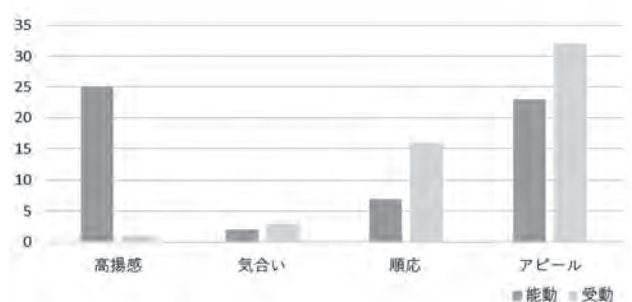


Figure 10 服飾雑貨・小物の期待する効用

けを高める効用を期待していることを示しており、能動的に下着・肌着を変化させることで気分を調整していると考えられる。一方、下着・肌着を受動的に変化させる場面では周囲に合わせることや周囲へのアピールを期待しているといえる。下着・肌着を受動的に変化させる場面では、シャツから透けることを避けるため白やベージュなどの下着をつけることと多いといえるが、これらは状況に順応し、悪印象を与えないことを目的としていると考えられる。

服飾雑貨・小物に関する検討 服飾雑貨・小物を能動的に変化させる場面と受動的に変化させる場面で期待する効用が異なるのかを検討するため、場面(2)と効用(4)のクロス表に対してカイ二乗検定を行った結果、0.1%水準で有意となった($\chi^2(3) = 27.176, p < .001$)。また、残差分析の結果、「高揚感」は能動的変化場面が多く、「順応」と「アピール」は受動的変化場面が多いことが明らかとなった(Figure 10)。

このことから、服飾雑貨や小物を能動的に変化させる場面では気分の高揚や気分転換を期待しているといえる。衣服やヘアスタイリングを変えなくても、服飾雑貨や小物を普段と変えることで手軽にバージョンアップできると考えられる。一方、服飾雑貨や小物を受動的に変化させる場面では周囲に合わせることや周囲へのアピールを期待しているといえる。服飾雑貨や小物は特に制限されやすいため、順応し、アピールのために変化させていると考えられる。

総合考察

本研究では、短期的なバージョンアップとしての装いの変化について、装いの変化場面の内容および装いに期待する効用の自由記述から検討することを目的とした。以下において考察を行っていく。

分析の結果、自分の意志で特定の装いを選択し変化させる場面とは「心機一転」と「プライベート」な場面であり、期待される効用としては「高揚感」などの気分の調整という側面が強いことが示された。一方、そうせざるを得ないために特定の装いを選択し変化させる場面とは「非日常」で「規律」のある場面であり、期待される効用としては「順応」と「アピール」という環境に合わせて順応していることのアピールの側面が強いことが示された。このことから、装いによる短期的なバージョンアップは能動的変化と受動的変化という場面によって分けてとらえることが重要であることが明らかとなった。

自分の意志で特定の装いを選択し変化させる場面については、積極的なバージョンアップといえ、手軽に気分の調整ができる点にメリットがあるといえる。そうせざるを得ないために特定の装いを選択し変化させる場面については、消極的なバージョンアップといえ、周囲に合わせる点にメリットがあるといえる。また、場面によって効用も異

なることから、場面にどのような意味を見出すかが装いの効用を考える上で重要になるといえる。今回、能動的変化場面と受動的変化場面に分けたが、個人が場面に対してどのように意味づけるかによって効用も異なってくるということが明らかとなった。このように考えると、受動的変化場面であっても、そこに意味を見出すことで積極的なバージョンアップにつながる可能性もあると考えられる。

本研究の実践への示唆としては、短期的なバージョンアップとして装いを強制する教育についての再検討が挙げられる。例えば、「スーツを着たらやる気が出る」と言われて、外部に出かけるわけでもない授業でスーツの着用を強制されて、学習に対するやる気が出るだろうか。これは大学などの教育機関などで何も考えずに行われがちな指導である。この指導での一番の問題は「スーツを着るとやる気が出る」と装いによる短期的なバージョンアップを誤解し、強制していることにある。装いによる短期的なバージョンアップの効用として、衣服の受動的変化場面で気合はほとんど挙げられていないことから、「スーツを着たらやる気が出る」に明確な根拠はない。受動的変化場面における短期的なバージョンアップとしての装いは、その場に合わせたことをアピールしているにすぎないのである。このように、短期的なバージョンアップとしての装いを強制する教育については、科学的根拠に基づいて、考え直す必要があるといえる。

今後の課題としては、3点挙げられる。1点目は、本研究では大学生と社会人を対象としたが、人数が少なかったため、大学生と社会人の比較を行うことができなかったことである。今後は、対象者を増やし、おかれている社会的状況も加味したうえで検討を行う必要があるといえる。2点目は、自由記述のみのデータで検討を行ったことである。今後は、自由記述のような質的データではなく、量的データを用いて、仮説検証を行っていく必要があるといえる。3点目は、本研究では短期的なバージョンアップに焦点を当てたため、ピアッシング(大久保・鈴木・井筒, 2011)やタトゥー(鈴木・大久保, 2017)などの長期的なバージョンアップとしての装いの効用について検討することができなかったことである。ピアッシングやタトゥーなどはある程度永続的な変化を引き起こし、固有の意味を持つことから、今後はその効用についても検討していく必要があるといえる。

引用文献

- 大坊郁夫(1993). 魅力の心理学(3)化粧文化, 29, 75-91.
 神山進(1998). 被服の社会・心理的機能 繊維製品消費科学, 39(11), 18-22.
 川名好裕(2012). 化粧と笑顔による魅力変化 立正大学心理学研究年報, 3, 19-32.
 Kwon, Y. H., & Shim, S. (1999). A structural model for weight

satisfaction, self-consciousness and women's use of clothing in mood enhancement. *Clothing and Textiles Research Journal*, 17, 203-212.

松井豊・山本真理子・岩男寿美子 (1983). 化粧の心理的効用 マーケティング・リサーチ, 21, 30-41.

森川和則 (2012). 顔と身体に関連する形状と大きさの錯視研究の新展開: 化粧錯視と服装錯視 心理学評論, 55, 348-361.

大久保智生・鈴木公啓・井筒芽衣 (2011). 青年期におけるピアッシング行為への許容と動機: 身体装飾としてのピアスに関する研究 (1) 繊維製品消費科学, 52, 113-120.

西藤栄子・中川早苗・藤原康晴 (1995). 服装によって生起する多面的感情状態尺度の作成 繊維機械学会誌, 48, 57-64.

鈴木公啓編 (2020). 装いの心理学: 整え飾るこころと行動 北大路書房

鈴木公啓・大久保智生 (2017). いれずみを入れる人は何を求めているのか—効用の予期と結果が満足度や後悔そして今後の意図に及ぼす影響— 日本パーソナリティ心理学会第26回大会発表論文集, 64.

鈴木公啓・菅原健介・完甘直隆・五藤睦子 (2010). 見えない衣服—下着—についての関心の実態とその背景にある心理的効用 繊維製品消費科学, 51 (2), 113-127.

鈴木公啓・菅原健介・西池紀子・小松原圭司・西口天志・藤本真穂 (2014). 男性における下着の消費行動: 「こだわり」についての心理的要因の検討 繊維製品消費科学, 55, 677-686.

宇山侑男・鈴木ゆかり・互惠子 (1990). メーキャップの心理的有効性 日本化粧品学会誌, 14, 163-168.

渡邊映理 (2013). 健康成人女性の化粧行動における生理心理学的研究: ストレスホルモン系, 性ホルモン系への影響 *Cosmetology: Annual report of cosmetology*, 21, 138-144.